

## 大学院アーカイブズ学専攻課程の開設

学習院大学教授 高埜 利彦

日本の文書館制度を前進させるため、本会は「公文書館法」（1987年12月）制定の前後より「専門職員養成制度」に関する提言をとりまとめ、政府等への要望を行ってきた。その中で私自身は、同法付則条項撤廃、公文書以外の記録群保存を射程に入れた新法制定、「文書館学（史料管理学）を基本科学」とした「研究・教育システム」の構築、そして「アーキビスト養成課程および専門職人事への具体的提案」等を目的とする第二次専門職問題特別委員会に参加し、その報告書「アーキビスト制度への提言」（『記録と史料』第7号、1996年）をとりまとめ、以後、専門職問題に関わる委員会の研究・討議に参画してきた。

このような中で、私が勤務する学習院大学大学院人文科学研究科では、2008年4月よりアーカイブズ学専攻課程（博士前期課程、博士後期課程）を開設する予定となった。会員諸氏に紹介をさせていただき、広くご批判とご協力を賜りたいと考える次第である。

その目的は、端的に言って、欧米やアジア諸国と較べて格段に遅れた、わが国のアーカイブズ制度を進展させるパイオニアを社会に送り出すことにある。このため本専攻は、世界水準のアーカイブズ学の学問的知識を発信する研究拠点、また専門職大学院に近い発想のもとに、実践的かつ懇切な教育によってアーカイブズの専門職（アーキビスト）を養成する教育拠点となるように体制の整備を進める。

本専攻の定員は、博士前期課程15名、博士後期課程3名であり、専任教員は5名、入試は秋期と春期の入学試験により行われる。本専攻では、新卒業生のみならず、行政・企業等で記録・アーカイブズ関連の業務に携わっている現職者、図書館・博物館等でアーカイ

ブズ資料を取り扱っている司書・学芸員等、あるいはデジタル情報社会の中でアーカイブズを核とした新しい情報基盤の構築を目指す社会人をも積極的に受け入れる。なぜなら、それを機に現場における従来の業務がより確かなアーカイブズ（レコードキーピング）・プログラムに発展したり、あるいは新しいスタイルのアーカイブズが開発・運用されたりする可能性をも引き出す必要があると考えているからである。これに合わせて、授業科目は平日の6時限目と土曜日を中心に配置し、博士前期課程を2年間で修了できるものとした。

教育課程は、ユネスコや欧米諸国等の教育指針やカリキュラムを分析・評価し、理論科目と実務科目のバランスや内容などの点で国際的標準に適うものとした。ただし、国によって背景となる歴史文化は異なるのであり、日本の場合にはアーカイブズに関する市民の認知度が低いことや、膨大な古文書、行政文書、個人文書が消滅の危機に瀕していること等が大きな課題であると捉え、アーカイブズの考え方を学問的に普及・啓発していく力、また地域社会や団体組織の中で整理・保存や情報化を実践していく力の育成を重視するものとした（右表をご参照ください）。

博士前期課程では、「コア科目」を中心に「学際科目」・「応用科目」を学び、修士論文を執筆することとなる。「コア科目」は、理論研究、資源研究、管理研究からなり、アーカイブズ学の中核的知識を体系的に学ぶものである。「学際科目」では、図書館情報学と博物館情報学を学び、より広い情報資源学の領域からアーカイブズをとらえる視点を獲得する。「応用科目」は、修士論文に向けた研究を進める演習と、現場から科目学習の意義や理

論等の適用・応用のあり方を学ぶ実習からなる。以上により30単位以上を取得した上、修士論文を提出し、修了を認められた者が「修士(アーカイブズ学)」の学位を取得することとなる。

博士後期課程は、「応用科目」の「アーカイブズ学演習」を中心に履修し、教員による個別的指導のもと世界に通用する博士論文執筆に取り組むものである。またアーカイブズ学研究者・教育者となる観点から様々な科目を

履修して研究を進める。そして20単位以上を取得した上、博士論文を提出し、最終試験に合格した者が「博士(アーカイブズ学)」の学位を取得することとなる。

以上のように、日本で初めてとなるアーカイブズ学専攻を準備しているところである。会員諸兄には、実習などの点で別段のご協力をお願いしなければならないと考えているところだが、まずは、職場等において話題の一つにお取り上げいただければ幸いである。

## ◆◆ 授業科目一覧 ◆◆

	科目名(テーマ)	担当教員	概要
コ ア 科 目	アーカイブズ学理論研究Ⅰ(アーカイブズ学基礎理論研究)	保坂裕興教授(2008年4月就任予定)	情報理論、レコード・コンティニューム論、法制度論、専門職論などから基礎理論を研究する。
	アーカイブズ学理論研究Ⅱ(日本及び海外アーカイブズ史)	安藤正人教授(2008年4月就任予定)	世界と日本における発展過程をたどり、民主主義社会を支える根幹システムとしての将来展望を考える。
	アーカイブズ学理論研究Ⅲ(海外アーカイブズ学文献研究)	保坂裕興教授	優れた海外文献を講読することを通して海外の研究状況を把握・検討し、世界水準の研究能力を涵養する。
	記録史料学研究Ⅰ(前近代の組織と記録)	高埜利彦教授	日本前近代の組織体の構造と機能を記録システムを中心に研究し、アーカイブズ学的な記録史料学を学ぶ。
	記録史料学研究Ⅱ(近代の組織と記録)	中野目徹講師(筑波大学准教授) 小風秀雅講師(お茶の水女子大学大学院教授)	国、地方自治体、企業等の組織体構造と機能について記録システムを中心に研究し、記録史料学を追求する。
	記録史料学研究Ⅲ(東アジア記録史料論)	武内房司教授	中国を中心に記録と記録システムの歴史を研究し、日本のさまざまな記録システムに与えた影響を考える。
	アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅰ(現代アーカイブズ管理論)	安藤正人教授	システム設計から調査論、評価論、検索論まで、アーカイブズを科学的に保存活用する現代的方法を考える。
	アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅱ(レコードマネジメント論)	高山正也講師(国立公文書館理事) 古賀 崇講師(国立情報学研究所助教)	行政や企業のアーカイブズ・システムの基盤となるレコード・マネジメントについて理論と実践の両面を学ぶ。
	アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅲ(記録史料保存論)	安江明夫講師(国立国会図書館顧問)	紙から電子記録まで様々なアーカイブズ資料を物理的に保存・管理していく科学的な考え方と方法を学ぶ。
	アーカイブズ・マネジメント論演習Ⅰ(アーカイブズ整理記述論)	大友一雄講師(国文学研究資料館教授) 加藤聖文講師(同助教)	アーカイブズ資料の構造やコンテキストを科学的に研究し、適切な方法で整理・記述する実践的訓練を行う。
アーカイブズ・マネジメント論演習Ⅱ(アーカイブズ情報処理論)	入澤寿美教授 牟田昌平講師(国立公文書館公文書専門官)	コンピュータ情報処理の基礎とともにアーカイブズにおける情報技術やネットワーク・システムについて学ぶ。	
学 際 科 目	情報資源論Ⅰ(図書館情報学研究)	高山正也講師(国立公文書館理事)	情報資源の保存活用という点で共通性を持つ図書館情報学について学び、アーカイブズ学との連携を考える。
	情報資源論Ⅱ(博物館情報学研究)	水嶋英治講師(常磐大学教授)	情報資源の保存活用という点で共通性を持つ博物館情報学について学び、アーカイブズ学との連携を考える。
応 用 科 目	アーカイブズ学演習Ⅰ,Ⅱ(アーカイブズ学研究法Ⅰ,Ⅱ)	保坂裕興教授・安藤正人教授	個人研究や共同研究を通じて学生の研究能力を開発し、専門職としての実践的な問題解決能力を育成する。
	アーカイブズ学実習	保坂裕興教授・安藤正人教授	アーカイブズ等の現場で年2週間程度の実習を行う。